

Latvija

Dievs, svētī Latviju!
Latvija, mīļā Latvija!
Latvija, mīļā Latvija!

日本ラトビア音楽協会ニュース

第13号
(2008年8月25日発行)

日本ラトビア音楽協会事務局

〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内

Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725

E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者 加藤晴生

〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Fax 04-7132-5423

E-mail katohr@earth.ocn.ne.jp

編集代表者 徳田浩

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集室

Tel・Fax 03-3203-0363

E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

特集

ラトビア歌と踊りの祭典

史上空前の規模、この凄さはやはり直接触れないと語り尽くせない！

日本ラトビア音楽協会の「2008年ラトビア歌と踊りの祭典」視察団（加藤晴生団長《専務理事》以下43名）は、全員十分過ぎる満足感を得て7月18日、無事に帰国した。今年はラトビア独立90周年と重なり、史上空前の規模となった祭典に驚嘆し、ラトビア人が心を一つにして祖国を思う強い意志をしっかりと感じ取った。一行は協会主催とラトビア外務省主催の二つのレセプションを通じて多くの人々と交友を深めた他、町の中でも様々なラトビア人との出会い、

語らう場面に遭遇し、それぞれが草の根外交の役割りも果たした。当協会メンバーの参加は現地の新聞でも大きく取り上げられ、外務省手配のバトカー先導で歌の祭典会場に向うなどVIP気分も味わった。

多くの参加者から感想文が送られたが、共通点は“この凄さは言葉では語りきれない、実際に見なければ分からない…”。参加できなかった方も参加したつもりでお読みください。

旅行を終えて

「歌と踊りの祭典」視察旅行団

団長 加藤 晴生（専務理事）

今年はラトビア独立90周年。今回の「歌と踊りの祭典」の参加者は史上最高の38,601人。旧ソヴィエト体制からラトビアの独立回復への移行期、ラトビア国民のエネルギーが大爆発させた90年の熱烈祭典を上回る規模で行なわれました。

私達のリーガ滞在は実質3日間という短い期間でした。その間、心配された夜間の野外会場での寒さや降雨もなく、天気にも恵まれ歌と踊りの祭典を興奮と感動をもって満喫、また日本大使館のご好意による大使館、当協会共催レセプションとラトビア外務次官ペンケ夫妻主催によ

る、この二つのレセプションを通じてラトビアの人々との交流や彼らの当協会に対する期待の大きさをあらためて実感するなど実り多い数日を過ごしました。

祭典の時期はラトビアの音楽関係者たちにとって非常に多忙なので、はたして私達のレセプションにどの程度集って貰えるのか不安でしたが、当日はパブリクス前外務大臣（現・日議員連盟会長）、外務省、文化省、音楽関係者はじめ幅広い分野から私たちの人数を上回る参加者が集まり、当初予定した100名規模のレセプションができました。とりわけラトビア音楽アカデミーからはシーマニス院長はじめ副院長や教授など要職者7名が出席されたことには私なりに責任の重さを感じまし



た。作曲家協会会長ブラウリンシュ氏、ガルータ財団ボルマ女史、パッサ音楽財団理事長アイナ・カルンツエイマ女史、今年12月リーガ大聖堂少年合唱団を日本へ送り出すリーガ大聖堂合唱学校のエレンストレイツ校長夫妻（歌の祭典の名譽指揮者）、この秋来日予定のピアニストのソルベイガ・セルガさん、日本語スタジオ「言語」のブリギッタ・クリーミヤさんなども見え、私の心配は杞憂となりました。幅広い分野からの集まりの中で、協会設立にラトビア側で



民族の強い団結を象徴する歌の祭典、お馴染みのアイラ・ビルジーニャ女史も指揮台に立った（左）



貢献されたエドガルス・カッツイ氏（ラトビア科学アカデミー名譽博士）、アウスマ・デルケーヴィッチャ女史（指揮者）およびアイラ・ビルジーニャ女史（指揮者）の三人に対し、藤井会長名で感謝状と記念品を贈呈しました。デルケーヴィッチャ女史は欠席されたのでジントルスの幹事長ダッチェ・アダムソンさんに託しました。因みに感謝状は日本語とラトビア語の両国語で書かれラトビア語は堀口大樹氏によるものです。



大使館でのレセプションは言葉も通じにくい初対面同士の集まりなのでどの様に盛り上げようかと考えていましたが、なかなかこれという案

が出ませんでした。そんな折、妻からせっかくラトビアへ行くのだからラトビアの歌を覚えたいと云われました。彼女が所属する合唱団からの参加者も歌いたいとのこと。これがヒントになり、ラトビアの人が好む歌を歌えば場が和むだろう。練習が出来なくて下手でも構わない。批判は覚悟の上で、レセプション開始の合図に「私の祖国は小さいけれど」をいきなり歌うことにしました。この他に「風よ 吹け」と日本の歌を含む5曲の譜を用意してあとは成り行きに任せることにしました。指揮は会員の工藤悠一郎氏と赤池喜代さんをお願いしました。この案は上手く行ったようです。私が招待客の応対で会場を離れている間にラトビア

（次ページへ続く）



ファンタスティックな踊りの祭典

旅行を終えて(加藤晴生)

(前ページより続く)

人たちも歌いだし、日・ラ歌合戦のようにまで盛り上がったとのことでした。会場に戻ってみると確かに和んだ雰囲気は漂っていました。現地新聞によると当協会にはメンバー50名ほどの合唱団があり、4回訪ラしていることになります。そのように紹介された以上、実際に「ラトビアのうたを歌う会」を作らなくてはと思っています。また、新聞は「外務省は彼らに歌の祭典のクロージングコンサートを見る機会を見つけた。これは遠く離れた日本でラトビアの文化を促進していることに対する報い(報酬)である。」とも報じました。年が明けてから私にとって最も厳しい仕事は二つの祭典の入場券確保でした。それも何とか解決できて祭典の見学が実現したことを嬉しく思っています。

外務省ペンケ次官夫妻主催のレセプション会場で次官夫妻に挨拶をしました。次官はこやかに「あなたたちの協会のことは詳しく知っています。」このレセプションに招待されることは出発間近になって大使館から知らされました。その時は少人数が招待されるとのことでした。直前になって、「全員が招待されます。当日はバスを用意するので18:00までに外務省の前に集まって下さい。雨合羽を用意するので傘は持たないように。招待状はラトビアについてから渡します。」との連絡がありました。招待状は各人宛の正式なものでした。当日集合場所へ行くとパトカー3台が交通整理をしていま

した。私達は早めに着き、グループも大勢でしたので自然に全員が一号車に乗りパトカーの先導で会場へ向かいました。バスは5台用意されました。このレセプションに招かれたのは各国大使や外国からのVIP達でした。誰が仕掛けたのかわかりませんが私たちにとっては素晴らしいプレゼント、「サプライズ」でした。

今回の旅行は年長者が多かったのですが皆さん自己管理が上手な方たちばかりで全員が元気で楽しく終えられて心よりよかったと思います。アンケートで旅行期間を8日間と10日間に分けて希望を取ったので各人のスケジュールに合わせて参加できたこと、ウィーンでの観光も夫々自分で行きたいところへ行けるよう自由行動を基本としたので自分なりの旅が楽しめたこともあって、この旅行が充実したものになったと思っています。

皆様、ご協力ありがとうございました。また、この旅行をご支援くださったヴァイヴァルス駐日ラトビア大使閣下及び同大使館の皆様並びに岡田駐ラトビア日本国臨時代理大使様及び同大使館の皆様をはじめこの旅行に関係された皆様のご支援とご協力に心より厚く御礼申し上げます。

私たちの協会は間もなく創立5年目に入ります。これを機に今回の旅行で感じ取ったラトビアの方々の気持ちを大切に末永い友好関係を深めるために、一層充実した協会となるよう努力して行きたいと思えます。今後とも皆様のご協力をお願いします。

V・ザトレルス大統領スピーチ

団結は歌の力、また5年後の祭典まで祖国に責任を!

こんばんは、ラトビアの男性たち、女性たち、少年たち、少女たち!

今日私たちすべての心は歌と踊りに開かれ、ラトビア独立90周年記念の年を祝います。第1回歌の祭典とともにラトビア人の民族意識も生まれたのです。すべての時代において、歌と踊りの祭典はラトビアの歴史を描いてきました。この祭典は、私たち民族を未来に向けてひとつにするためにあるのです。

ラトビア人はそれぞれが強い気質を持ち、粘り強く動きます。ラトビア人は自分の家庭から力を受け継ぎます。ラトビア人は数百年もかけてできたラトビア的な風景である納屋に自らの土台を置きます。我々はラトビアが団結し、ひとつになるよう望みます。よって5年ごとに、歌と踊りの祭典に集まり、ひとつの声で呼吸をし、踊りで模様を描き、一つのリズムで鼓動する心臓をそれぞれが感じるのです。そして手を取り合って民族意識を感じ、民族の伝統という空間を作り、そこで互いに喜びや、希望、心情を深く吹き込み合うのです。そして次の歌と踊りの祭典まで、自らの祖国に責任を持つのです。

ラトビア人の心には3つのものがあります。それは知識、勇気、そして

愛です。

知識の中で私たちは子供たちを育み、民族の伝統を守り、民族の知恵を敬います。知識にこそ、自らの未来を作る力が隠されているのです。

勇気というのは、偽りや不正に対して黙って立っていることではありません。勇気とは、物事をよい方向へ覆すことのできる信念と自信を意味しています。

『歌は力なり』。

100年も前に、ヤーニス・ツィムゼ(ラトビア人啓蒙家)はこう言っています。「仲間との合唱活動と祭典で歌うことは、木に葉をつけ、緑を輝かせ、花を咲かすことができるものである。しかしその基本と根幹は学校であり続ける。私たちが残念ながらよく耳にする唾や音痴を解消できるのは、学校によってのみである」。

私たちの団結は歌の力にあり、よって皆さんに今年にでも学校の指導要領に歌唱を盛り込むことを提案いたします!(ここで会場から大きな拍手)

力を合わせてがんばりましょう! ラトビアに神の幸あれ!

(歌の祭典クロージングコンサートで
訳・堀口大樹)

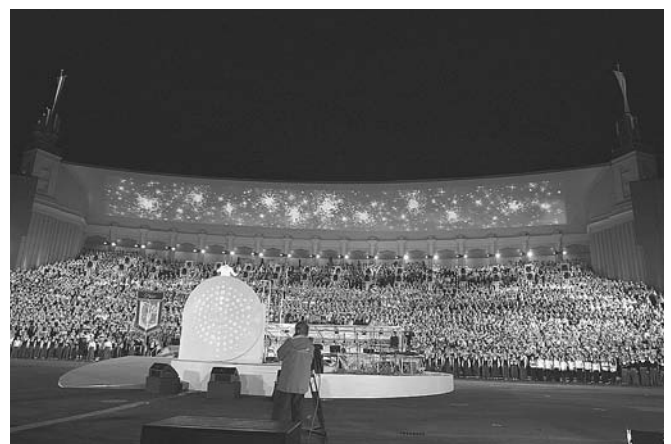
2008歌と踊りの祭典データ

史上最多! 参加者38,601名

- ◎祭典すべての参加者 38,601名
- ◎総指揮者・総指導者 48名(内
名誉指揮者・名誉指導者17名。)
- ◎合唱団 394団体、
ボーカルアンサンブル 54団体。
- ◎舞踊団 544団体、
踊り手 13,700名。
- ◎吹奏楽オーケストラ 55団体、
プロオーケストラ 5団体。
- ◎105の民族工芸所から913名の職
人が2,942作品を出展。
- ◎コークレコンサートに計120のコー
クレが競演。
- ◎ラトビア少数民族の音楽コンサートに国内15民族、計940名が参加
- ◎海外19の国の計600名が各種行事

に参加。

- ◎地方から参加者を乗せた973台の
バスがリーガに集結、413台が歌
の祭典クロージングコンサート
に、460台が踊りの祭典クロー
ジングコンサートに集結。
- ◎2008年歌と踊りの祭典のロゴは
103の大きささまざまな点による太
陽がモチーフになっており、多く
の人々が団結してひとつの祭典を
作るイメージに仕上がった。
- ◎7月8日に行われた合唱戦で混声
合唱団カメルKamēr、女声合唱
団スピーゴSpīgo、男声合唱団
GaudeamusとFrachori(同点2位)
がそれぞれ優勝に輝いた。



歌の祭典は深夜まで続く

- ◎祭典には259名のボランティアと
20名の国防隊員が活躍。
- ◎祭典中参加者には30万リットル
の水が支給された。
- ◎歌と踊りの祭典実行に財務省・文
化省から240万ラットが支給され
た。
- ◎収入は125万ラット(祭典グッズ
へのロゴ使用、グッズ販売箇所ラ
イセンス、チケット販売など)、
支援者からの寄付75万ラットで

ある。

- ◎参加者への食事提供費として地方
自治体に105万ラットを支給した。
- ◎スポンサーのうちラトビア貯蓄銀
行、ビール会社アルダリス、ラト
ビア携帯電話社が計100万ラット
を提供。その他石油会社、自動車
会社(ちなみに日産モーターセン
ター)、食品会社、ラトビア鉄道、
建築会社がスポンサー。
- ◎参加者年齢 6歳~88歳

特別
レポート

日の照らない国に輝く「17の太陽のうた」 日本から松下耕氏が参加

ラトヴィア／リーガ在住
黒澤 歩

幕開けにパウルス

「何ヶ月も灰色の空の下で過ごす、つかの間の太陽の日差しで人は生き返る思いがする。腰が痛いのも忘れるものさ」ライモンズ・パウルスはそう言う。ラトヴィアで「マエストロ」といえば、それはパウルスのことである。イネセ・ザンデレのラトヴィア民謡風の詩を歌にしたマエストロの「天の美しい太陽」は、「世界の太陽の歌」(World Sun Songs、以下WSSに略)に寄せられた16カ国の作曲家による合唱曲の中でも1分半と最も短い。

WSSは、ラトヴィア国内外にて名声高い合唱団「カメル」(Kamēr)の指揮者マリス・シルマイスが、合唱団結成15周年を終えたところに発案し、世界各国の指揮者に呼びかけたイベントである(カメルは今年で18周年を迎える)。

パウルスの伸びやかで荘厳な美しい調べは、これから演奏会を始めようとするときにいつもよく映える。会場にやってきた聴衆のまだ落ち着いた気分をすーっと沈め、歌い手は最後に声を整える。7月3日と4日、ラトヴィア大学講堂における演奏会WSSも、パウルスの歌で幕が上がった。

パウルスは「カメル」と、クラシックの他、ジャズ風のポップスやミュージカルの舞台上で共同作業を積み上げてきた。「マリスとの音楽をするのは大きな喜びだ。でも、マリスの指先を追ってコンサートマスターをするのは楽じゃない。彼の解釈はあまりにも自由で、いつどこで空気と一体化するように音を止めるのか、予測不可能だ」

パウルスの歌は合唱曲としてよく歌われる。子どものとき、最初に口ずさんだメロディがパウルスの曲であるのは、ラトヴィアでは「カメル」の指揮者に限ったことではないだろう。ところが、実はそのほとんどが歌謡曲として世にでたものだ。だからこそ「合唱曲の作曲家」を自称しないパウルスは、「天の美しい太陽」をピアノで弾いてマリスに要求した。「それがどう可能かは知らないが、ピアノでドビュッシーのプレリュードを弾くのと同一ような、印象派の滲む音を合唱で出した」と。



プログラム表紙

耳と目と肌で感じる演奏会

WSSに選ばれた作曲家は、長年歌ってきた団員らの好む人選の結果である。「カメル」のために「太陽」をテーマとした合唱曲を作成してほしいとの依頼に、それぞれの民族的要素を盛り込む当初の条件を途中で削除したのは、より自由な作曲を可能とするためである。

3日の演奏会には、国営放送が生中継に3時間の時間を割り、いずれも初演ということもあり注目度が高い。16カ国の作曲家のうち15名が同席し、大統領、首相、文化相ほか、文化関係者要人の姿がカメラに映し出される。パウルスの短い曲で幕開けると、シルマイスがそれぞれの演奏の前に短くコメントをする。

スウェーデンのスヴェン・ダヴィッド・サンドストロームによるウィリアム・ブレイクの詩「ああ、ひまわり！」に続き、ウズベキスタンの若手ポリーナ・メチュリャノヴァによる「オフィヤート」(ウズベク語で浄化、幸福、成功を意味する)。ウズベクの新婚夫婦の寝台を取り巻いて行われる儀式の調べに歌詞はない。歌い手たちは階段状の舞台に円形状に立ち、男たちがあらかじめ腕にかけていたスカートを腰に巻くと、歌い手に男も女もなく一体感に包まれる。ノルウェーのビョルン・アンドル・ドラグはマタイ福音書を取り上げ、「木のように」で北欧の短い夏に輝く太陽を讃える。オーストラリアのステファン・リークは、アボリジニの伝説に登場する太陽の精を歌いあげた。息子をおいたまま食料を探しにでて迷ったまま帰れない母の叫びがけたたましく、暗い会場内を走り回る。演奏は一曲増すごとに、音だけでなく、衣装と動き、それに照明で空間を満たし、聴く者の意識はどんどん研ぎすまされる。

フランスのチェリー・ベクーの仏フォークロアに根ざした「一日の印象」では、男たちは後ろ手の階段上に立体的に、女たちは舞台前列に二列に並び、まるでうわさ話に興じて

いるように地球温暖化の危機をも歌い、南アのヘンドリック・ホフメイルによるブッシュマンの祈り(「砂漠の太陽」)、エストニアのウルマス・シサスクによる「太陽を作る奇跡」に続いて、ロシアのレオニード・ディシャトニコフによる「神の偉大さについての朝の思索」となる。こうした長いタイトルは、文学や映画にも共通するロシア的要素か。そして、低く強い女声にロシア民謡の調べを聴くロシアの個性を強烈に感じる。英国のジョン・タヴェナーの「永遠の太陽」、アラスカ在住のアメリカのジョン・ルーサー・アダムの「天の四つの太陽」に続き、リトアニアのヴィタウタス・ミシュキニスによる「行かないで、お日様」が、心にすーっと優しく響いた。それが、私の耳に馴染んでいるラトヴィア語に近い言葉と民謡調の旋律だからだろうか。リトアニア楽器の笛が歌をつなぐ。

そして、松下耕さんの賛美歌Jubilate Deoがファンファーレの如く高らかに奏でられ、続いて1980年生まれのブルガリアのブラガ・ディミトロヴァによる「太陽から生まれた」。次のヴェネズエラを代表するアルベルト・グラウによるラテン的な「やあ、よく響く天の太陽！」では、全員がスカートを裏返し、クリーム色の上着に真っ赤なロングスカートがよく映え、まるで巫女が勢揃いしたかのようだ。ソプラノの澄んで通るソロと軽やかなラテンのステップの動きが印象的だ。グルジアのギヤ・カンチェリ「太陽のための子守唄」は、うってかわってピアニッシモの壮麗で清冽な調べ。「太陽」という言葉を27カ国語でひたすら歌う。そして、ペーテリス・ワスクスの「誕生」で幕を閉じた。ワスクスらしい複雑でありながら宇宙的な広がりにも包まれるようなスケールの大きな作品だ。その間に大学講堂の天窓の覆いがゆっくりと払われていき、誰もが天に目を上げる。最後まで冴えた演出である。演出、衣装、芸術監督共に、国内のトップを招き入れた成果が見える。

生の醍醐味

会場で聴くと、テレビの生中継では聴こえなかった音、見えなかったものがあまりにも多いことに気づか



↑松下耕氏を紹介するページ
作曲家らを壇上に迎えて(4日)



され、改めて生演奏に触れることが欠かせないことを実感できた今回である。また、二日間の同じ演奏を、同じように真摯に演奏する体力的かつ精神的な持続力は、リハーサルでも気を抜かない合唱祭の伝統にも通じる。そこに、必然的に毎回違う雰囲気が生まれることこそ素晴らしい。2日目は前日初演の張りつめた緊張がとれ、指揮者の精神的な穏やかさが伝わってきたし、歌い手たちもこの二日間のために作り上げて来たものが頂点に達しつつあることを感じてか、毎回の演奏の後に、会場に座る作曲家に向けて拍手喝采。作曲家は、立ち上がって歌い手と聴衆に挨拶した。演奏後には作曲家と関係者の名を呼んで花束と共に壇上に招き上げるが、二日目には歌い手と指揮者にも聴衆から花束を渡す人が絶えず、合唱祭の光景を思わせた。そして、アンコールで、再びパウルスの別の作品を歌うと、会場は総立ちで拍手の波にうずもれしばらく引けなかった。ラトヴィア人が、感情的に一体となって高揚する「あの感覚」がここにある。二日目にギヤ・カンチェリやパウルス、ワスクスの間に松下氏の姿が見られなかったのがちょっぴり残念だ。

カメル＝今ここにいるうちに

WSSにシルマイスは、パウルスとワスクスという、ラトヴィアが生んだ作曲の天才二人を巻き込んだ。複数の作曲家が参加した国は、ラトヴィア(次ページ最下段へ続く)

第1回ラトビア大使館サロンコンサート

寄贈ピアノ披露 至福の時を味わう

2008年6月25日、八王子市在住の佐藤満喜子さんが所有するピアノを、清水光子当協会会員の斡旋でラトビア大使館に寄贈され、7月29日(火) 18時半から、その披露を兼ねて第1回サロンコンサートが開かれた(ラトビア大使館・日本ラトビア音楽協会共催)。

このピアノは昭和50年頃、母親の輝江さんが、まだ幼かった満喜子さんの為に、親交のあった清水さんを通じて購入したものだ。その後も清水さんは終始このピアノの調律を続けていた。満喜子さんは成長して早稲田大学を卒業後、現在は両親の許を離れて生活し東京大学広報課に勤務、いつしかこのピアノを弾く主が不在になった。こんな経緯があって清水さんが佐藤さんに大使館へ寄贈の話を持ちかけ、佐藤さんも「このピアノがこんなに素晴らしい場所で甦ってくれるのは本当に嬉しい」と喜んで同意した。清水さんにとっても永年手塩にかけたピアノであり、大使館に搬入後、自らの手で念入りに調整を行い、この日も午前10時半に大使館にきて完璧に調律を終えた。

清水さんは昭和35年に国立音大調律科を卒業、同音大器楽部へ就職して、当時は女性には出来ない仕事

と思われていた女性調律師第一号になった。結婚後も子育てをしながら、八重洲ピアノ、さらに国立音大器楽部が独立した(株)国立楽器の専属調律師としてこの仕事を48年間続けるベテラン。現在は、最も技能の卓越した女性調律師として知られる。ちなみに国立楽器はご主人が経営する会社。

◇

開会に先立ち、P. ヴァイバルス大使は「今日は特別な日。音楽協会のお骨折りで、大使館にピアノが寄贈され、この場所で音楽を通じて両国の一層の親密を図る記念すべき日になった。佐藤さん、清水さん、音楽協会に心から感謝します」と深い謝意を述べた。この日は満喜子さんの代わりに母親の輝江さんが出席した。

会場の関係で聴衆は20名に限定されたが、会員演奏家による素晴らしい生の音がウッディーなホールに心地良く響き、全員、至福の時を味わった。演奏会後は大使館、協会の配慮で、美味な食べ物、美酒が振舞われて心豊かな談笑が続き、日本とラトビアの友情の絆がさらに強くなった。

【演奏曲】(演奏順)

①風呂本 佳苗 (ピアノ)

- 1) 「ピアノ組曲」(伊福部昭)から「盆踊り」
- 2) 「月の光の下で」作品41 (ヴィートルズ)「眠れわが子よ」「波の歌」
- 3) 琉球幻想曲 (伊藤康英)

②河西 麻希 (サクソホン)

宇田川優美 (ピアノ)

- 1) ダイナ (ガルータ)
- 2) ジャネマの歌 (ガルータ)
- 3) 聖なる愛(ガルータ)
- ③久元 祐子 (ピアノ)
- 1) 思い出 (バッシュ)
- 2) 即興曲B♭ 作品142 の3 (シューベルト)
- 3) ラトビア民族の歌 (ヴィートルズ)

※ヴィートルズ、ガルータ、バッシュはラトビアの作曲家。

◇



大使から佐藤輝江さん、清水光子さん、加藤晴生専務理事に感謝状贈呈



演奏者に大使から花束が贈呈され聴衆も大きな拍手。右から風呂本佳苗、河西麻希、宇田川優美、久元祐子の各氏

ラトヴィアの若きピアニストとの出会い ラウマ・スクリデのこと

佐藤 ますみ (コンサートイマジン)

クラシック音楽のマネージャーという仕事のささやかな楽しみのひとつに、演奏家を通して様々な国を知ることができる、ということがあります。「ラトヴィア」という国の名前自体は、マリス・ヤンソンス(指揮者)、ミッシェル・マイスキー(チェリスト)など、名だたる音楽家を生んだ国としてよく耳にしていますが、その存在をより身近に感じるようになったのは、ひとりの若いピアニスト、ラウマ・スクリデさんとの出会いによってでした。

ラウマさんが生まれ育ったのは首都のリガ。合唱指揮者のお父さんとピアニストのお母さん、そして彼女たち三姉妹、というスクリデ・ファミリーはよく知られた音楽一家だと聞いています。長女のリンダ、次女のバイバはともに弦楽器奏者ですが、末っ子のラウマさんはお母さんと同じピアニストの道を選んでいきます。

私の彼女とのめぐりあいは2006年、姉バイバのリサイタル・ツアーに共演者として来日した時のことでした。ソロを弾いたわけではなかったにもかかわらず、私を含む多くの関係者は彼女の放つ才能のきらめきに強く惹き付けられました。そして、この時の出会いが翌2007年の日本でのソロ・デビューのきっかけになりました。

この時、私が彼女の音楽に何より強く感じたのは、彼女が子供のころから身をもって体験してきたであろう「音楽をする喜び」でした。後にラウマさんに子供のころの話を聞いてみると、テレビを見るよりも合唱の練習に行くのをなにより楽しみにしていたと言います。また、ラトヴィアの子供たちの多くが、彼女と同じように音楽に親しんでいることにも深い感銘を受けました。

ラウマさんのピアノの最大の特長は、そうした体験から培われたに違

この日、大使から佐藤満喜子(母親の輝江さんが出席)、清水光子、加藤晴生(協会専務理事)の3氏に感謝状、演奏者4名に花束が贈られた。



いない「歌」の豊かさにあると感じます。現代の若いピアニストたちにありがちな、外面的な効果のみを狙ったかのような演奏とは対極にあります。

そんな彼女の演奏が往年の女流ピアニストたちを連想させるということで、評論家の皆さんの間で大変な評判を呼んだのはとても嬉しいことでした。しかし、私たちマネージャーが演奏家と協同作業をする中で本当の喜びを感じるのには、実は、演奏家が彼らに課せられたハードルを越えた、と感じる瞬間の方なのです。

ラウマさんがこのハードルを越えた、と私が最初に感じたのは、日本でのデビュー・リサイタルを、それもNHKのテレビ収録が入るという大変な緊張を強いられる中で、彼女が自分の音楽を演奏してベストを尽くしたことでした。それは本当に感動的な瞬間でした。

そしてこの2008年8月、ラウマさんは東京と横浜で読売日本交響楽団とチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を演奏する機会を得ました。東京での協奏曲デビューとなる今回も、故郷ラトヴィアで培った「歌」で、必ず私たちに音楽の喜びを与えてくれるものと信じています。

(部長プロデューサー)



今秋、再来日するラウマ・スクリデ

特別レポート (黒沢歩)

(前ページより続く)
ィアだけである。その理由を、「ラ

トヴィアの太陽のイメージと音楽がいかに多様であるかを示したかった」とシルマイスは語る。

合唱大団の伝統にゆるぎはない。

「カメル」とは、ラトヴィア語で「〇〇をするうちに」という意味。辿り着くところではなく、辿るプロセスに生きるラトヴィアの良さを秀

逸な協和音に奏でられ、久しぶりに鳥肌が立った7月である。

(2008年7月5日記)

関学の元ラトビア人教師 I・オゾリンめぐって 駐日ラトビア大使館訪問[学院史編集部便り27号から抄録]

池田 裕子

(関西学院 学院史編集部)

90年前に関西学院で英語を教えていたイアン・オゾリンのことを前号（学院史編集部便り26号・Latvija 11号に抄録掲載）で紹介したところ、思いがけず、駐日ラトビア共和国大使館から電話を頂戴しました。1月28日でした。「私たちの国とオゾリンについて詳しく調べていただき、ありがとうございます。私たちが日本の大学と深い関係があったことを知って大変嬉しく思います。ラトビアの歴史にとっても大きな発見です。こちらで翻訳してもいいですか？仕事で上京される時はお電話ください。大使館にご招待したいと思います」。思いもよらぬ内容とあまりに流暢な日本語にドギマギしている間に、オゾリンの国の大使館から頂いた初めての電話は終わってしまいましたが、早速、永田雄次郎学院史編集部室長に報告し、実現に向け、動き始めました。歌手の小田陽子さんが、大使はリチャード・ギアを彷彿させるステキな長身の男性、電話をされたオレグスさんは若くて見目麗しい貴公子風の方であると教えてくださいました。

3月11日、いよいよ大使館訪問の日がやってきました。大使館は瀟洒な住宅街の中にある白亜のお屋敷でした。立派な扉に気後れしつつ呼び鈴を押すと、東洋人の女性が迎えてくれました。美しい庭が見える大きな一枚ガラスの前のソファを勧められ、飲み物の好みを尋ねられました。紅茶をお願いして腰掛けると、花瓶に生けられた見事な百合の花が目にとまりました。玄関に入った時から感じていた心地よい香りの正体はこの花だったのです。間もなく、ペーテリス・ヴァイヴァルス特命全権大使、グナ・レイマンドヴァ三等書記官、オレグス・オルロフス大使館員の3人が目の前に現れ、心のこもった歓迎の挨拶を受けました。

大使は、2メートルはあろうかと思われる長身で、期待通り、リチャード・ギア似のソフトな笑顔が魅力的な方でした。「大変申し訳ないが、日本語ができないので、英語で話してもいいですか？」。最初に遠慮がちに許可を求められました。この丁寧な申し出に、「大使館での会話が全て英語だったらどうしよう？」という不安が的中したことも忘れ、「私の方こそラトビア語ができなく

て申し訳ありません。ぜひ、英語でお話させてください」と答えてしまいました。さすがに外交官は交渉上手です。

大使は、オゾリンの記事を翻訳し、本国の外務大臣に送って大変喜ばれたことをお話になり、本当によく調べてくださったと丁寧に礼を言われました。私は、「関西学院に残る資料には、オゾリンが学生に深く愛されていたこと、北米から来た宣教師と全く違う接し方をしたこと、ある時期学生寮で共に生活し、学生と同じ物を食べ、銭湯にも通っていたこと、YMCAでは英語だけではなくロシア語も教えていたと書かれています」とお答えしました。

大使は、初代駐日大使としての派遣が決った時、日本・ラトビア関係の歴史を勉強される中でオゾリンの名を知ったそうです。けれども、彼に関する情報は2行しかなく、日本に対してラトビアを代表した最初の人物がオゾリンであったことを知っていたに過ぎないとおっしゃいました。

私は、オゾリンの生涯を知りたいと思っていますと話しました。関西学院を中心に考えるなら、その直前の東京時代、さらにその前のアメリカ時代、離日後のラトビアでの生活等、興味は尽きません。記録によるとオゾリンは1959年に亡くなっています。来年は没後50年に当るのです。それまでに少しでもオゾリンの足跡を辿ることができればと思います。大使は「ラトビアに調査にいらっしゃるなら、公文書館等に連絡して、最大限の便宜をはかります。ぜひ、いらしてください」と願ってもない申し出を受けました。

大使との会談は1時間近くに及びました。グナさんと、オレグスさんも、熱心にメモを取りながら、おつきあいただきました。私は関西学院の資料としてお持ちした図録『関西学院の100年』と英文パンフレット、そして、1919年の『高等学部（商科）卒業アルバム』に掲載されたオゾリンの個人写真と教員室の写真の複写（紙焼きとCD）を差し上げました。「こちらはオゾリンの写真もないのです。早速外務大臣に送ります」と、大使は喜ばれました。

日本・ラトビア関係の歴史を振り返る時、オゾリンの働きは重要な位置を占めますが、ラトビア人の来日という側面から捉えると、両国間にはもう一つ興味深い出来事がありま



ラトビア大使館で 右から大使、池田さん、グナさん、オレグスさん

した。それは、ラトビアの飛行家ヘルベルトス・ツクルス大尉がリーガから東京までの単独飛行に成功したということです。1936年11月20日にリーガを出発したツクルスは、翌年6月2日、羽田の東京飛行場に降り立ちました。当時の『東京朝日新聞』は、ツクルスのことを「ラトビア勇士」「空の珍客」「空の弥次さん」等と表現し、滞在中の動向を伝えています。この一件は、大使から教えていただくまで知りませんでした。

私はオゾリンの名前にに関して、ヤーニス・オゾリンシュであるにもかかわらず、関西学院ではイアン・オゾリンと名乗っていた理由をお尋ねしました。実は、大使の息子さんも、オゾリンと同じヤーニスという名前だそうです。ところが息子さん現在通っておられる東京のアメリカンスクールではジョンと呼ばれているそうです。「覚えやすい名前です。ドイツではヨハン・ハンスと呼ばれるでしょう。私たちは名前にはこだわられません。恐らくオゾリンもそうだったのではないのでしょうか」。そしてオゾリンとは、樅の木という意味であることを教えてくださいました。樅は、木を大事にするラトビアでも特別な意味を持つ木だそうです。オゾリンも書いているように、ラトビア人は他の民族（特にロシア人）と間違われることは耐え難いことなのですが、名前にしてはかたがた鷹揚なのかも知れません。

私は最初にお電話を下されたオレグスさんの日本語の発音が大変美しいことに感銘を受けていましたので、そのことを話題にしました。「ラトビア人にとって、日本語の発音は難しくないのでしょ。そう言って、大使はにっこりされました。会話の途中、大使は何度かラトビア語でオレグスさんに指示を与えられ



関西学院で教鞭をとったオゾリン氏
(関西学院 学院史編集部提供)

ましたが、それはこれまで耳にしたことのない妙なる調べでした。美しい詩を聞いているように感じられました。そう申し上げると、「ありがとうございます。ラトビア語は古い言葉で、サンスクリット語の仲間です。私たちは普通3ヶ国語を話します。ラトビア語とロシア語、それにもう一カ国語です」。

最後に大使から、今年秋には、1974年以来、首都リーガの姉妹都市である神戸で「リーガ・ウィーク」が開催されることを教えていただきました。大使は、いずれかの機会を利用して、オゾリンが英語を教えていた関西学院にも立ち寄りたい、そして、学生に話をする機会が得られればありおがたいとおっしゃいました。私は、「ぜひ、お越しください。帰りましたら院長に申し伝えます」とお答えしました。

お暇する時、玄関まで見送ってくださった大使に、「ラトビア語で『ありがとう』がどう言うのですか？」とお聞きしました。「バルディエス！」。初めて憶えたラトビア語でご挨拶申し上げ、私は大使館を後にしました。まぶしい春の光の中、私はオゾリンに関わった様々な人のことを思い浮かべました。

秋のコンサート案内

岡村喬生副会長

喜寿記念日に歌う、想い出の歌



お馴染みの岡村喬生当協会副会長が喜寿記念日に、歌とトークで栄光と数奇な道を辿ったオペラ歌手生活を振り返る。

日時 10月25日(土) 14時開演

会場 浜離宮朝日ホール

主催 朝日新聞社

全席指定 5000円

演奏曲

□オブラマイフー(ヘンデル)

イタリアの歌

愛しい人と遠く離れて(サルティ)

祈り(トスティ)

カタリ(カルテッコ)他

□淋しくも一人眠ろう

(ヴェルディ)

□クヴィットリス(ハイドン)

ドイツの歌

魔王(シューベルト)

黄昏の夢(Rシュトラウス)

子守唄(ブラームス)他

ボリスの死(ムソルグスキー)

※入場券のお申し込みは協会事務局(遠藤守正)まで

矢田ちひろピアノリサイタル



日時 10月11日(土) 14時開演

会場 津田ホール

全席自由 4000円

演奏曲 フランク、ショパン、

ブラームスの作品

国立音大、ウィーン市立音楽院卒業。ウィーン芸術週間に毎年出演する他、日本大使館後援コンサート等、

多数のコンサートに出演。08年5月イタリアのコモ・シルバー響とベートベン第3協奏曲を弾き好評博す。本協会会員。

慶應義塾歌グランドコンサート



慶應義塾創立150周年記念行事で、150年の歴史を音楽で綴るガラコンサート。第2部では「若き血」などのカレッジソング名曲集&新作の数々を披露。総勢450名、3時間及び大音楽会。主催は音楽三田会、応援部三田会。

日時 10月19日(日) 16時開演

場所 NHKホール

全席指定 S8000円、A5000円、

B3500円

チケットぴあで取り扱い中

江藤純子(ピアノ)&ローガンDX(男声合唱) 2008演奏会



ローガンDXは1992年に早稲田大学グリークラブの古いOBで組織した17名のアマチュア男声合唱団。ポップス中心に全てオリジナルアレンジで誰もが愛する曲を、江藤純子の華麗なピアノとのコラボ演奏が特徴で、ローガンサウンドと呼ばれて人気を集める。レパートリーは200を超える。リーダーで編曲指揮を担当する徳田浩は当協会広報担当常務理事。メンバーには会員が数名いる。

日時 9月26日(金) 18時半開演

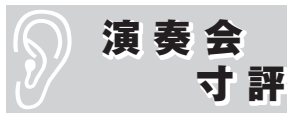
場所 駒場エミナース

全席自由 2000円

演奏曲目

①魅惑のローガンサウンド

Harbor Lights,



演奏会 寸評

独自の響きを持つ一流合唱団の風格

徹底した発声訓練により、大学OG合唱団のレベルを遥かに超え、独自の響きを持つ一流女声合唱団に成長した姿を今回も存分に披露した。その立役者とも言える育ての親で、16年間指導を続ける大谷研二氏が不慮の事故で出演できないアクシデントに見舞われながら、団内指揮者・竹村洋美が3ステージで見事に大谷氏の音楽を具現した。

この日のステージ構成は①30年の歩みからのセレクション、②東ハンガリーの作曲家、ミクロシュ・コチャール作品集、③女声合唱と箏のための「秋来ぬと」(柴田南雄曲)、④「秘密の花」(西村朗曲)と極めて意欲的。

①は単に昔を振り返るだけではなく、現在の桜友の力を誇示する選曲が秀逸で好ステージ。②はノンビブラートに統一された発声と正確なピッチで、東欧の一流合唱団を彷彿させるような見事な演奏、この日一番感銘を受けた。③は文句なしに美し

い演奏で、福永智恵子の箏の音色と見事に調和して会場を包み込んだ。ただ欲を言えば楽座秘抄の柔らかい古語の中に秘められた恋の情念を強く伝えて欲しい気がした。④は作曲者の西村朗氏が指揮。合唱指揮は今回が初めてと聞いたが、大作曲家の感性は振っても一流で、この大曲を



「秘密の花」指揮：西村朗、ピアノ：鈴木真理子

存分に歌わせ、スケール大きくまとめ上げた。大谷氏のピンチヒッターを充分過ぎるほど務めた熱演で、終わった後も会場が暫く余韻に酔った。メンバーの表情にも歌い切った充実感が溢れていた。

◇

28年前の第1回演奏会をふと思い出した。その時のメンバーも数名おられたようだが変わらない若さに圧倒され羨ましく思った。最後のステージは現役もオンステしていたが、私の席からは区別できないほど若々しかった。回を重ねる度に新たな面を出し続けるこの合唱団の次の演奏会が楽しみだ。(徳)

(6月22日・紀尾井ホール)

稲田大学グリークラブ・シニア会 第9回定期演奏会

長寿時代の生き方は

こうあるべきという見本

早稲田大学グリークラブの古いOBで組織した男声合唱団。過半数が70歳以上で90歳を過ぎたメンバーも元気に歌っている。この日は高田三郎作曲「心の四季」男声版(全7曲の組曲)を全員暗譜で見事に歌い切った(指揮・福井香織)。この人たちに「長寿時代をどう生きるか」という課題はない。第一ステージは丸山美雄編曲集で「少年時代」、「世界に一つだけの花」などの青春ポップス集。第三ステージは西岡隆編曲による「中山晋平の世界」。第二

ステージは賛助出演の女声合唱団「コーロ・こせやま」が組曲「小さな虹」(萩原英彦曲)を好演した。

(5月10日・四谷区民ホール)



賛助出演したコーロ・こせやま



「心の四季」指揮：福井香織、ピアノ：西岡隆

Bridge Over Troubled Water 他
②江藤純子ピアノ・ア・ラ・カルト
愛の挨拶(エルガー) 他
③次の世代へ歌い継ぎたい日本の歌

小さい秋見つけた、城ヶ島の雨、初恋、さくら(森山直太郎) 他
※お問合せ、お申し込みはLatvija編集室(徳田)へ。



ラトビア・リトアニア・ウィーン、 充実・感動の9日間

7月9日（水）

8:30成田集合。全員が揃って9:20結団式の後、フィンランド航空AY74便ヘルシンキ行きにて定時11:00出発。現地時間に時計を合わせる（-6時間）。14:50ヘルシンキ着。乗り継ぎ。乗り継ぎ機は EMBRAER170。曇りだがぱらっと雨が落ちる。定時16:05発。16:46リーガ空港着。荷物をとり17:15空港を出る。今年もう85歳を数えるエドガルス・カッタイ先生のお元気な姿での出迎えに感激する。ヘルシンキの乗り継ぎのとき手荷物検査があったが、それ以降ユーロ圏内では、パスポート・手荷物・税関の検査は無かった。一旦バスに乗った後再度空港内でラトビア通貨（ラツ）に両替。1ユーロ=0.7ラツ。（概算1ラツ=235円）曇り空、17:45バス出発。現地ガイドはユリアさん。18:10ホテル・エリザベス着。ホテルは今年3月の新築で快適。泊。

7月10日（木）

7:00朝食。バイキング、質・量ともに良。くもり。朝は涼しい。8:30バスで市内見学へ出発。8:50～9:15アールヌーボーの建築物を見学。車窓から中央市場を見て、9:28リーガ大聖堂下車。ガイドのイルマルさんも加わる。3グループに分かれて旧市街見学。狭い地域で時々他のグループに遭遇する。11:50再集合し、PUB KROGS CITILAIKIで昼食。ビールは400円程度でどの店でもうまい。14:45市庁舎広場で自由解散。琥珀・チョコレート買い物組、その他に別れる。15:20ホテル帰着。16:15日本大使館でのレセプションに出席のためホテルロビー集合。男性はネクタイ着用。女性も盛装、徳島のお二人は浴衣を用意して目を引いた。大使館は歩いて10分ほど、ビル9階の広報ホールにパーティの用意がしてある。お客様は50人ほど。工藤悠一郎さんの指揮による「私の祖国は小さいけれど」が合図となりレセプション開始。日本大使館岡田臨時代理大使の英語の挨拶、パブリクス前外務大臣の挨拶、加藤専務理事が挨拶してカッタイ先生、デルケーヴィチャ女史及びアイラさんへ協会から感謝状を贈呈した。そして赤池喜代さんが「浜辺の歌」を振り、明日の歌の祭典での主役の一人、アイラ・ビルジーニャさんの登

場では一気に盛り上がった。料理にはお寿司もあり山盛りの山葵（わさび）にびっくり。ビール、ワイン等大いに飲む。「遥かな友に」や「風よよげ」が歌われ、昨年陛下の通訳をされた当協会の現地会員・黒澤歩さんや来年日本の大学に進学希望のラトビアの高校生と話が盛り上がる。19:00自由解散。ホテルまで歩いて帰る。夜の7時なのに陽は高い。泊。

7月11日（金）踊りの祭典

7:00朝食のバイキング。曇り、薄日。9時過ぎバスでルンダーレ宮殿へ出発。10:20ルンダーレ到着。宮殿入場の前に城の塔にコウノトリが居ると一騒ぎ。宮殿見学。12:15～13:20近接のレストランで食事。黒パンに豚のピカタ。帰りはバルト海沿いの別荘地であるユーロマールを見学。超遠浅の海岸で塩水も日本ほど辛い。16時過ぎホテル帰着。われわれのバスの前にパトカーに警護され国旗をはためかせたベンツが到着。すらっとした女性がホテルに入り厳重な警戒態勢。ホテルの中庭でTVのインタビューを撮影していたようだ。国旗は白地に赤い十字が5つ。帰国後調べたらグルジアの国旗。大統領夫人だったらしい。18時過ぎバスでホテルを出発。近くのレストランKristapaで夕食。ほうれん草のスープ、魚。19:55バスで出発。10分で踊りの祭典の会場に着く。会場はサッカー場。全席指定で指定席への入場は20:30から。それまではスタンドの周りのお祭り騒ぎを味わう。民族衣装の出演者がグループで歩き回り、屋台にはみやげ物に食べ物、飲み物が並んでいる。踊りの祭典のテーマは「時を踊りぬいて」もうひとつのテーマは「楽しみながら生きる」（堀口大樹先生の解説から）でした。22:00からのサッカー場をいっぱいに使った13,000人のダンスは凄い一言。もっと民族的、且つほのぼのとしたお祭りをイメージしていた私には、本質は全く違うけれど北朝鮮のマスゲームを連想してしまった。空が明るい22時に始まり暗くなってからはたいまつやライトを使ってただただ踊りが続き、最後の光の踊りは圧巻。0:08終了。会場をあとにして午前1時頃ホテル帰着。



日本大使館でのレセプションで記念撮影

中嶋勝彦さんPhotoアルバムから



7月12日（土）歌の祭典

7:30朝食のバイキング。10:10バスで観光に出発。ツアーメンバーの要望で4日目にしてバスの中で自己紹介をする。11:07ラトビアのスイスといわれるスィグルダ着。トゥライダ城見学。狭くて急な階段を上り塔の最上階へたどりつくとき冷たい風が火照った身体に心地よい。女性陣は一軒しかない高級土産物屋さんでお買い物。男性陣は駐車場近くの屋台でお買い物。13:15レストラン Riga, Meža Parka Lielā estrādēに着き食事。14:00出発。15:38ホテル帰着。自由行動で外出したメンバーはものすごい夕立にあう。傘が全く役に立たない降りだったが30分で小降りになりその後やむ。歌の祭典

前に開かれるラトビア外務省からのレセプションへの招待状をいただいたわれわれはホテルロビーに集合。17:30バスが出発するころは青空。皆さっきの雨が早く上がってよかったと喜び合う。ラトビア外務省でチャーターバス5台に乗り換える。18:00出発。われわれ以外にも100人近い招待客がいて乗り込んだバスは、サイレンを鳴らしたパトカーに先導されて夕方の渋滞道路を信号を無視してスイスイ進む。会場近くの公園に入ると一方通行を逆進して15分で会場の裏へ到着。裏ゲートで招待状を提示して会場へ入るとすぐ立派なテントがありパーティ会場になっている。まさしくVIP待遇に皆さんご満悦。すぐには挨拶も無か

（次ページへ続く）

ラトビア・リトアニア・ウィーン、 充実・感動の9日間

(前ページより続く)

ったが飲み物料理ともたくさんそろっているので勝手に始めてしまう。食べ物が一番人気はマトンの焼肉。このツアーで唯一の肉でお代わりもすぐになくなった。宴席の途中、ホストのノーマンズ・ベンケ外務次官の挨拶があった。

歌の祭典の会場は深い森の中の小高い丘を利用して作られている。ゆるい傾斜のステージは12,000人が立って歌うという。客席もゆるい傾斜があり座席は立派な椅子が固定され、番号が振ってある。完全指定席で50,000人収容という。日が高い20:15着席。少しずつ席が埋まっていく。会場の外は周りが低くなっていて屋台と仮設トイレがびっしりと並び出演者と観客でごったがえしている。夕方の豪雨で会場の整備が必要となり開演が30分遅れて21:30からとなる。600人のプラスバンドの演奏で始まる。場内は満員。合唱団12,000人の入場が始まる。ラトビア語のアナウンスで指揮者と演奏団体が紹介される。指揮者が高い指揮台に上がり棒を振ると、全員のコーラスが始まり、この繰り返しが続く。事前に想像していたよりはるかに整然とし、トレーニングが積まれた印象。巨大な村祭りではなく国家威信の発露とさえ感じたが、今日のためにわれわれが練習したみんなが知っている歌も歌われ、心が休まる思いもした。暗くなってからはペンライトを使い荘厳さも感じた。

終演予定の0:30を過ぎてもアンコールの連続。他には帰る人がほとんどいない中、1時近くになって心を残しながら退席した。Aコース8日間組は今朝5:30バスで出発しなければならぬのだ。真っ暗な森の中を往きと同じバスに乗って外務省を目指す。われわれの1台目のバスはスムーズに走り1:50外務省に着いたが、会場に心を残した二人とサポートした添乗員氏の三人は3台目のバスとなり、帰りの渋滞に巻き込まれてなかなか着かない。帰りはパトカーの先導が無かったのだ。3台目のバスの到着を待って専用バスに乗り換えホテル帰着が2:30。お疲れ様でした。明日はA組、B組に分かれる。
※翌日から2組に分かれる。

◇

◆A組(8日間コース) 13名

7月13日(日)

寝る間もなく5:30にホテルを出発しガイドのソニアさんと共に空港

へ。バルティック航空BT431便7:25発でリーガからウィーンへ。8:25ウィーン国際空港着。時差マイナス1時間。ガイドはりつ子さん。そのままバスにて市内観光に出発。ウィーン市街に入る途中にある楽聖たちが眠る中央墓地に寄りベートーベン、シューベルト、ブラームスの墓に参る。続いて世界遺産のシェーンブルン宮殿へ。女帝マリア・テレジアが完成させた壮麗、広大な宮殿である。昼食は市内レストラン。隣の席のグループも日本人。観光客に日本人が多い。午後、ベートーベン所縁の家(ハイリゲンシュタット遺書の家～聴覚が戻らなくなって遺書を書いたといわれている)を見学。バスの中では前日の徹夜状態からほとんどが寝込んでしまい、目的地に着くと起きるということの繰り返しであったがスケジュールを消化し16:30ルネッサンスホテル着。夕食。ウィーン在住の当協会会員野村三郎さんご夫妻が来宿し、翌日の観光の打ち合わせ。泊。

7月14日(月)

朝食の後、9:00ロビー集合。本日のお世話役の野村さんからロビーでハプスブルグ家についての予備知識を授けられてベルヴェデーレ(美しい眺めの意)宮殿(上宮)の見学へ地下鉄で出発。19～20世紀のオーストリア絵画の展示美術館になっており、特筆すべきはグスタフ・クリムトの「接吻」を鑑賞できたこと。野村夫人が待つ市内のレストラン「モーツァルトカフェ」へ電車で急ぐ。中心街のしゃれたレストランでご夫妻ともども昼食。午後からは野村夫人の案内でオペラ座見学、ショッピングなどゆったりとウィーンを楽しむ。野村さんご夫妻ありがとうございました。夕食後各部屋でなごりの宴も。泊。

7月15日(火)

朝食後8時ロビー集合、バスにてウィーン国際空港へ(某氏の忘れ物でホテルにとんぼ返り事件も含む)。AY766便11:15発にてヘルシンキへ。14:40ヘルシンキ着。3時間ほどの待ち時間。AY73便17:20発にて成田に向かう。

7月16日(水)

8:55無事成田着。解散。

◇

◆B組(10日間コース) 31名

7月13日(日)

7:30朝食。降りそうな空模様の中、



浴衣姿の赤池喜代さん指揮で浜辺の歌を演奏

歌の祭典オープニングコンサート・アルバムから



9:04隣国リトアニアに向けてバス出発。31人。途中で雨が降ってくる。一時は激しい降りに。国境を越えてリトアニアに入ったところで両替。1ユーロ=0.3リタス。1リタスは概算50円。10:30出発。11:20十字架の丘着。ちょうど雨が上がる。12:00出発、10分でシャウレイのレストランJONYNEに着き昼食。天気晴れてくる。13:30出発。17:00ヴィリニユスのホテルホリディイン着。雨が降りだす。19:30～21:30、1階レストランで夕食。遠藤守正さ

ん(13日生れ)、植木佐代さん(18日生れ)の誕生日祝、ハッピーバースデーをハモル。雨上がった様子。泊。

7月14日(月)

7:30朝食、バイキング。リトアニアとは雨の降る国との意味の由。9:03ホテル出発。ガイドのユナス氏は45歳、大学教授で流暢な日本語。シャレや皮肉もとばす。10時ころから小雨。カウナスの杉原記念館10:42着。雨やむ。落ち着いた高(次ページへ続く)

ラトビア・リトアニア・ウィーン、 充実・感動の9日間

(前ページより続く)

級住宅街の中にある。ビデオを鑑賞し、机に座ってビザへの署名の真似をする。一言で言えば「感動した」である。11:35出発。10分でカウナス城址に着く。城址見学のあとレストランBERNELIU UZEIGAで昼食。13:42ヴィリニウスへ向かいバス出発。15:04大聖堂着。旧市街見学。大統領官邸、ヴィリニウス大学等。16:40から40分買い物タイム。琥珀を買った人も。17:35ホテル帰着。19:30～20:25ホテルのレストランで夕食。食後はそれぞれの部屋で交歓会も開かれた。泊。

7月15日(火)

7:30朝食。自由行動。ホテル11時集合だが、先にバゲージダウンして旧市街のレストランに11:30集合の選択もできる。11:30～12:45昼食。13:00大聖堂前からバスにて空港へ。13:30ヴィリニウス空港着。ウィーンへ向けて13:30搭乗手続

き。Austrian arrows FOKKER100、15:15離陸。16:50ウィーン空港着。時差1時間マイナス。16:30空港出発。ガイドの清水氏。16:50ホテルルネッサンスに到着。野村三郎先生が見えて明日の野村班の打ち合わせなどをはじめる。19:00からホテルのレストランで今ツアーの打ち上げ。トマトのサラダ、七面鳥。ウィーンではコーヒーはオプション。20:40打ち上げ終了。泊。

7月16日(水)

7:30朝食。ご飯、味噌汁、梅干、沢庵等朝食がある。各グループ希望の観光へ。プタベストなどオプション組2コース9人はもう出発済。野村先生の絵画の講義が中心の野村組6人は9:00集合。バス観光組は8人9:03出発。シェーンブルン宮殿着、ベルヴェデーレ宮殿、ヨハンシュトラウス像、ハイリゲンシュタット、ペーターベンハウス、ウィーンの森、カーレンベルグ山からのウィーン市街を眺望、オペラ座、ケルトナー通りで買い物するもの等々。みな地

下鉄U4で18:00ころ一旦ホテルへ。19:30グリーンツィングのレストランPASSAUERHOFに着き夕食。テーブルごとにウィナー、ハムの盛り合わせ、ザウークラウトが出、ワインを楽しむ。ヴァイオリンとアコーディオンの生演奏がすごい。21:50ホテル帰着。オプション組も帰って来てそれぞれヨーロッパ最後の夜を過ごす。泊。

7月17日(木)

6:50朝食。皆さん元気、平均年齢70歳超(?)のツアーとしては素晴らしい。8:35ホテル出発。9:20ウィーン空港着。フィンランド航空AY766便、エアバス。11:15ヘルシンキに向けて離陸。時差1時間進める。14:42ヘルシンキ着陸。ここで成田組15名、関空組16名に別れる。

◆【成田直行組】乗り継ぎの成田組は免税店で最後の買い物。16:30出国手続き、17:37フィンランド航空Y73便、エアバス離陸(日本時間23:37)。時差+6時間で時計を修正。

◇【関空経由組】入国手続きをしてヘルシンキ市内観光へ。セテナ広場のヘルシンキカテドラル宮殿見学。その後は港のそばのマーケット、海岸通り沿いのブランド店探索、デパート散策組と自由行動。空港に集合、AY77便20:20発にて関西空港へ離陸。

7月18日(金)

◆【成田直行組】1時過ぎ食事。旅行中はチキンが魚だったためビーフ料理を希望したメンバーが多かったが、ビーフはすぐ売り切れて照り焼きチキンと豆ご飯。8:39無事成田到着。15名解散。

◇【関空経由組】予定より10分遅れて12:05関空着。日通旅行社・岡野添乗員の尽力でいろいろのグループも国内移動の手続きがスムーズで、それぞれ夕方早目に東京に着いた由。

お疲れ様でした。

※このドキュメントは、旅行に参加した鈴木紘輝、内山守太氏の協力を得て作成した。(願原)

残暑お見舞い申し上げます

日本ラトビア音楽協会 会長 藤井 威明子	平成ビジネスアソシエーツ株式会社 執行役員 加藤 晴生	福島県芸術文化団体連絡協議会 副会長 福島市音楽堂運営委員長 板垣 忠直 〒960-0102 福島市鎌田字舟戸17 TEL 024-553-2745 FAX 024-554-0647 E-mail yanakyo@db.dion.ne.jp
朝日測量株式会社 市川 土地家屋調査士 合同事務所 司 法 書 士 代表取締役 市川 貞夫	学校法人メイ・ウシヤマ学院 ハリウッド大学院大学 附属ハリウッド美容専門学校 理事長 山中 祥弘 学 長	魚住コーラス「わかくさ」 指揮者 嵯峨山まり子
(有)華のハーモニー 水谷 鏡子 ラトビアは大好きな国です 〒145-0071 大田区田園調布 3-24-1	NPO法人日本童謡の会常任理事 (財)北原白秋生家保存会理事 山本 健二	遠藤税理士事務所 税理士 遠藤守正 (早稲田大学グリークラブ) 昭和37年卒 〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 TEL 042-745-3334 FAX 042-740-4725 E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp (日本ラトビア音楽協会事務局)
医療法人元益会 坂本胃腸科病院 院 長 坂本 旭 消化器内視鏡専門医 坂本伊知子 静岡県三島市大宮町 3-65 TEL 055-971-2277 FAX 03-3568-7229	元駐ラトビア日本国大使館臨時代理大使 駐日ラトビア大使館顧問 田中 享	矢田 ちひろ ピアニスト 〒158-0098 住所：東京都世田谷区上用賀 3-12-5 電話：03-3700-1378 FAX 03-3700-1388 E-mail : vienna-chihiro@kyj.biglobe.ne.jp
在旭川ラトビア共和国名誉領事館 名誉領事 井下 佳和 〒070-0087 北海道旭川市7条通13丁目60番地19 北海道録画センター メディアビル 3F TEL (0166) 25-5880 FAX (0166) 23-6100 まるまるNet 北海道 http://www.hofm.co.jp/ でラトビアに関する情報配信中	東川ラトビア館 http://www.latvia.eolas-net.ne.jp/index.htm 〒071-1464 北海道上川群東川町進化台 北海道録画センター EOLAS研究所内 TEL (0166) 68-4800 FAX (0166) 68-4600	草月流師範 石川 光翠 〒190-0001 立川市若葉町 2-43-23 E-mail ikerpepp@blu.m-net.ne.jp

参加者の声・声…

踊りの祭典

民族が心をつなげて祖国を大切に思う気持ちに鳥肌が立った

小林 雅子

(早大混声合唱団出身・元音楽ジャーナル編集部)

民族が心をつなげて自分の祖国を大切に思う気持ちというのは、こういうものなのか！これが今回の旅で私が受けた大きなショックでした。

バルト三国？ラトヴィア？一名前は知っていても、世界地図の上で確かな場所も知らず、姉のお供ということで、ラトヴィア音楽祭を聴きに行くツアーに参加することになりました。ガイド・ブックでラトヴィアの簡単な歴史を頭の中にたたきこみ飛行機に乗りこんだほどに、それまでの誤認識は大きなものでした。

ポーランド、ドイツ、旧ソ連などに支配されていた辛い歴史を持つラトヴィア（ラトヴィア人）は暗いかなあ…とのそれまでのイメージとはほど遠く、独立してからの、その回復のめざましさを目の当たりにし、びっくり。しかも、まだまだ純朴なのです。

「踊りの祭典」では1万数千人のラトヴィア人が、国中から選ばれて集まってきます。見物人はその倍近く集まるのだそうです。それを聞いただけでも、どんな大混雑になっているのだろう、私は会場でグループからはぐれたら、会えなくなってしまうのではないかと、恐怖心さえ抱いていました。この5年に一度の祭典に、各地方からバスを仕立ててやってきます。小さい子供からお年寄りまで…。皆バスの中で民族衣装に着替え、それぞれに、きれいにポーズをとり満面の笑顔で記念写真を撮っています。その情景が本当に素晴らしい。私の不安はどこへやら、会場の内外は混雑するどころか、なごやかな雰囲気いっぱいなのです。10代、20代の若者たちでさえおだやかに、子供やお年寄りと一緒に行動を共にしているのです。今の日本では考えられない光景です。国中から色々な団体が競ってきて、この本番の晴れ舞台には、勝ち残ってきた団体がそれぞれ得意のダンスを披露するのだろう…と想像していましたが、そうではありません。この1万数千人全員が、会場のあらゆる場所から入場して、しかも全員でマスゲームやスクエア・ダンスを披露するので



右側が著者 左が実姉の長岡喜美子さん（踊りの祭典会場で）

す。会場の上から見れば、そこには各地方を表わす模様が表現されていたようですが、そんなことよりも、一度にこの大人数が混雑することもなく、2時間の間出たり入ったりしながら踊り続けることに感動してしまいました。どうやって練習したのでしょうか？しかも、誰を見ても本当に楽しそうなのです。街では選にもれたのであろう団体が、公園の野外ステージで、ひっきりなしに踊ったり歌ったりしています。私たちは、国ごと大きく支配されることなく、侵略されることなく今日まで生きています。だから民族が心をつなげて自分の祖国を大切に思う気持ちというのは、なかなか理解できませんでした。眼の前にその姿を見ると、鳥肌が立つ思いがいたしました。激しい精神の高揚に左右されて行動するのではなく、また国から強制されているのでもない、祭典を楽しむ姿は、ただただ美しい…の一語に尽きました。民族を大切に（世界中どこでも「民族問題」は、あとを絶ちませんが）人たちの意識に、あらためて胸を打たれるとともに、日本人としての自覚さえ希薄だった私に、忘れていた何か大きなものを想起させてくれることともなったのです。

(2008年8月3日)

ラトヴィアへの想い

桜井 珊子（桜楓合唱団）

ラトヴィアの街と人

初めて訪れたラトヴィアは、あふれる緑と古くからの建物が美しく、人々が温かい、のどかな印象の国でした。

旧市街は14～15世紀から19世紀までに建てられた建築物が建ち並び、特にゴシック建築の美しく重厚な教会がいくつもあるのには、圧倒されました。新市街に入ると、19世紀後半から現在までの建物が並び、ガラスをふんだんに使った最近の建築が目を見ました。

しかしこの国の歴史を知ると、ポーランド、スウェーデン、帝政ロシア、そしてソ連と次々に侵略され、支配

されたそうで、胸が痛みます。でもだからこそ、非常に民族意識が強く、誇り高い国民性を持っているとも聞きました。

ラトヴィア人は花と歌が大好きだそうですが、公園の野外ステージで夜おそくまで、踊りや合唱が演奏されているのにはおどろきました。そこの衣装を着て出演しているのは、審査の難しい「踊りと歌の祭典」に出られない人たちのだと聞いてまたびっくり。プレゼント用の花束をかかえて歩いている人も、たくさん見かけました。

公園で出会ったご婦人

ホテルの向かい側の、豊かな緑に囲まれた公園。あき時間を見つけて、4人の仲間で散歩したときのことです。公園では夕方からの歌や踊りに備えてステージの準備をしたり、

いくつかの小屋がけの売店では、おみやげの民芸品を並べたりしていました。

ちょうど出会った堀口さんも一緒に歩いていると、ラトヴィア人の年配のご婦人に「日本からいらしたのでですか？」と声をかけられました。「わたしは日本が大好きだし、とても尊敬しています」とのこと。堀口さんの通訳で、次々話が進みます。

彼女は20年ほど前に、ぜひ日本に行きたいと思い、いろいろ面倒な手続きをやっとすませたところで、体を悪くしてしまった。ソ連時代（1944～1991ソ連に占領・支配された時代）だったので、いろいろ自由にならず、家族も…。と言って涙をぼろぼろ…。きっと身の周りに、つらいことがたくさん起きたでしょう。私たちももらい泣きして、別れを惜しみました。

日本大使館主催の歓迎パーティー

ラトヴィア到着の次の日の夕、日本大使館・日本ラトヴィア音楽協会共催によるラトヴィア音楽関係者との交歓パーティーに出席しました。日本臨時代理大使はじめ、関係の方々のスピーチの後、ビュッフェのごちそうを楽しみながら歓談。ラトヴィア在住のチャーミングな女性・黒澤さんがいろいろと気を配ってくださり、前外務大臣パブリクス氏をご紹介くださいました。長身の素敵なお方です。桜楓トリオで、黒澤さんに通訳していただきながらお話ししました。

私たちも合唱を長年続けていることを話し、歌の祭典を非常に楽しみにしていること、またこの祭典が



桜楓合唱団トリオ 左から高仲和子、桜井珊子、植木佐代の各女史

100年以上も続けられていることに、とても感銘を受けていると申し上げると、「その通り、国をあげての大きなイベントです」と説明してくださり、「十分楽しんでください」と言われました。

女声合唱団・ジントルスの方々にもお会いし、私たちのつたない英語で練習の様子などを伺ってみました。やはり仕事や家庭を持っている人も多く、忙しいけれど、歌うことが大好きだからとてもハッピーだと言っていました。また歌の祭典の初めの方の日に、世界中から選ばれた17人の作曲家（日本からは松下耕先生）の作品がラトヴィアの合唱団によって演奏されたのですが、これは黒澤さんに説明していただきました。

そして「私たちの合唱団も松下先生に曲を作っていただいているし、指揮も…」と話しました。「コー・マツシタ」の名前はさすがにご存じでした。

工藤さんの指揮で練習した数曲を歌い、喜ばれたようです。ラトヴィアの曲は、出席者の皆さんも一緒に歌ってくださいました。

踊りの祭典は万華鏡のような美しさ

11日はいよいよ踊りの祭典・クロージグコンサートで、テーマは「時を踊り通して」です。踊り手たちが、それぞれの地方や民族の模様・色を衣装で表し、朝から昼、夕方、夜という「時」を踊りで表現するのだそうです。

踊りの祭典の会場は大きな競技場です。その入口前の広場には、たくさんの民芸品や土産物、食べ物、飲み物などを売る店が立ち並んでいます。もう夜の9時になるというのに、白夜のため、昼間の明るさ。あちこちで、花の冠をつけて、色あざやかな民族衣装に身を包んだ踊り手たちのグループが、おしゃべりをしたり、ステップを確かめ合ったりしながら、出番を待っています。カメラを持って通りかかると、「私たちも撮って！」とポーズを取ってくれます。特

(次ページへ続く)

ラトビアへの想い(桜井 冊子)

(前ページより続く)

に少年、少女たちのかわいいこと!

10時近くに薄暗くなりはじめ、ようやく開演。アリーナには美しい衣裳の男女、何百人ものチームがいくつも、次から次へと音楽に合わせて、踊りながら登場して来ます。ゆるやかに、激しく、またマズルカのように…。出演者は1万2〜3000人とのこと。その美しさ、華やかさは、まるで巨大な万華鏡を見ているようでした。それを見下ろす観客席は満員。3万人を超えるという報告がありました。

アリーナは次々と場面が変わり、夜を表すのでしょうか、たいまつを持った男性チームが勇壮な踊りを披露したり、組み体操のようなパフォーマンスがあるかと思えば、ライトを手にした女性チームの美しく優しいダンスが…。最後は全員がそろって、踊りながら人文字を作ったり、さまざまな模様を描いたり、実に見事でした。踊り手はやはり若い人が多いのですが、よく見ると、まさに後期高齢者のおじさま・おばさまが楽しそうに踊っていたりして、ほほえましく思いました。

♪「歌の祭典」の素晴らしい、すごさ!!

ラトビアでは、地方や小都市で1860年代後半から急速に合唱が盛んになり、あちこちで小規模な歌の祭典が行われるようになったそうです。そして1873年6月に第1回の「歌の祭典」が行われたのが、現在の祭典の始まりとのこと。それから1990年のラトビア独立回復までの間、前出のようにさまざまな国の支配下にあっても、多少形を変えながらも、ほぼ5年ごとのペースですつと続いてきたのです。(堀口大樹氏「歌の祭典の歴史」による)

ラトビア旅行あれこれ

高仲 和子 (桜楓合唱団)

リガで歌(合唱)の祭典の会場に身をおいて一番強く感じたのはとうとう夢が叶ったの思いだった。

何年前だったかテレビで偶然に見た映像。民族衣装を着た大勢の人がひたすら歌っている姿。各地から集まったのか民族衣装も様々に美しく、抜けるように澄んだ声。合唱の素晴らしさと人の心をつなげてしまふ力を感じ、何時の日かその場に行かれたら…と夢見るようになった。

リガのホテルは大きな公園の前にあり、公園の野外ステージではリハ

今回の歌の祭典は、7月5日のオープニング・コンサートに始まり、いろいろなプログラムがあって、私たちが聴いた12日のクロージング・コンサート「ラトビア 太陽の地」で締めくくられました。この日の出演者は、合唱団員だけでも1万2000人、それに舞踊アンサンブルや吹奏楽団、オーケストラなどと聞いて、その規模の大きさにまぎびくりました。観客は4万人近いとのことでした。

場所は郊外の森林公園の中の大きな野外劇場。9時開演の前に、会場近くでのラトビア外務省主催ビューフェ・パーティーにご招待いただきました。会場までは外務省のバスで送ってくださるということでしたが、なんとパトカーが先導! サイレンを鳴らすパトカーに前後を守られながら、赤信号も突っ走るバスを、道行く人も怪訝そうに眺めています。「パトカーに先導されて、刑務所に連れて行かれると思ってるのかなあ?」に、爆笑!

座席についてステージを眺めると、大きな大きな階段状のステージに、合唱団員が続々と登っていきま。1万2000人の合唱団員が全部そろったステージは壮観でした。そして最初の音を聴いたときは、まず鳥肌が立ちました。指揮者は次々代わりますが、合唱メンバーはそのまま。ほとんどがアカペラですが、その響きの美しいこと! フォルテは地響きのように伝わり、ピアノニッショはそよ風のようなのです。

10時ごろになると日が暮れ始め、空は真赤な夕焼けに染まりました。周囲はこんもりした森…。こんなに素晴らしい環境の中で、こんなに極上の合唱を聴くことができるのはなんと幸せなことでしょう。この旅行に参加して本当によかったと、しみじみ感じました。

一サール中なのか、次々にグループが出て歌っているのが見えた。子供のグループからシルバークラブまで、聞こえてくる歌声もいろいろ…。素晴らしく響いているかと思えば、あれっ?と思う団体も。どこも、歌うことを楽しんでいるようすが伝わってきた。メイン会場以外に町のあちこちの仮設ステージなどで、このように歌ったり踊ったりしているのだとか…。周りにはテントを張った屋台の売り場があり、まるで日本のお祭りの縁日のように、それぞれ手作りの小物や土産物売って楽しい。

ホテルといえばホテル・エリザベスはVIPの利用も多いようで、警備

の人があちこちで見受けられた。そんなVIPの一人なのか、朝食時に中曽根ジュニア(弘文氏)が一人で食事をしている姿を見かけた。あちらも我々を日本人?というように眺めていらしたので、席を立たれる時にご挨拶に伺う。今回は祭典を見にいらしたのではなく、昨日はリトアニアからラトビアに入れ、今日は首相との面談の後、ポーランド経由で韓国に行かれるとか…。せっかくのこの時期に祭典を見られないとは、我々にとっては勿体無い!!としか言いようが無いが、政治家は忙しいのだろう。日本ラトヴィア友好議員連盟会長として、我々の日本ラトヴィア音楽協会のことをご存知のようで、「民間の文化交流は大切なので頑張ってください」とエールをいただいた。

日本大使館のパーティーで

会場の壁寄りにはいろいろな料理が並べられ、飲み物が配られた。皆で乾杯をして始まるのかと思ったら、適当に飲んだり食べたりして始まったのにはびっくり。リガの地ワイン(白)の味はすっきりと飲みやすかった。

私達の歌2曲(工藤さんの指揮でラトビアの「私の祖国は小さいけれど」赤池さんの指揮で「浜辺の歌」)でパーティーは一つにまとまって開宴。ご挨拶へと続く。合間にリガ在住の黒澤歩さん(ほっそりとした知的な美人)のご紹介で、前外相にお話を伺う。歌の祭典について「ラトビアにとって“民族の統一”を意味する。大切な遺産です」と語られたのが印象的だった。様々な苦難の時代を生き抜く原動力となっていたのだろう。

パーティーの最後はラトビアの方々の力強いコーラス。私達からもお礼のコーラス。

言葉は通じなくても、まるで合唱が取り持つ「日ラの歌合戦」のように和気藹々と会はお開きになった。

踊りの祭典

サッカー場を今回のために改築したという会場では、出演者13000人!観客はその何倍か。開会前の会場には、衣装を着た出演者のグループが記念撮影をしたりして楽しんでいた。子供のグループ、若者達のグループ、大人の人達…どの人もカメラを向けるとニコニコと人懐っこい笑顔。一緒にハイチーズ!でも、若い女性のきれいなこと!!男性はその写真ばかり撮っている人もいましたっけ。

今回の祭典のテーマは「時を踊りぬいて」。与えられた命を楽しむということで、朝から夜までと更に夜



圧倒された歌の祭典会場



明けを表わし、ラトビアの伝統的装飾模様を表現すると聞いた。会場の席は横の方だったので、残念ながらその模様ははっきりとは分からなかったものの、次々に変わる出演者の統一の取れた動きや踊りから、大きなエネルギーを与えられた。最後にはたいまつを持つ人々と交代するように、出演者全員のペンライトの青白い光が暗くした会場全体に広がって揺れた。それは、夜明けと共に真の世界平和を祈るかのようで、思わず私も共に祈っていた。

歌の祭典

今、歌の祭典のラトヴィアからの公式招待状を見ながら、数々の場面を思い出す。

外務省から会場までパトカーの先導で向かったこと、外務省のパーティー、ステージや会場の人々の人数の多さ、夜の9時半開始なのにステージ上の迫力ある夕焼け、次々と替わる指揮者と歌声の素晴らしい…。ラトヴィア語が分かったらもっと楽しめたかと、その点はちょっと残念。出演者は踊りの祭典の人々と較べてちょっと近寄り難い感じで、あまり写真は撮れなかった。矢張り踊りはパフォーマンスを大事にする人が多いのだろうか?

プログラムの終了は午前1時過ぎ。その後も客席やステージでまだ歌い続ける人々を後に、その余韻に浸っていたいと心に残してホテルに帰る。

翌日は9時にバスでリガを後にリトアニアに向う。車窓から見るリガの街はまるでまだ寝静まっているかのように、ひっそりしていた。朝まで歌っていたら、日曜日は文字通り安息日なのだろうと一人で納得した。

今はまた5年後に参加できることを願っている。

参加者の声・声…

ラトビア旅行で感じた
不思議な「奇遇」の幸せ

植木 佐代

(ラトビア語教室事務局)

昨年6月から「ラトビア語教室」の事務局をお引き受けしていることが縁で、この度の旅行にご一緒させて戴きました。これまで、教室にお迎えするゲストの方や大使館のオレグスさんから、ラトビアの国の様子や2003年の祭典の模様をDVD等でご紹介戴き、だんだんにイメージが膨らみ、旅行を楽しみにしていましたが、まさに「百聞は一見にしかず」で、1万人以上の人たちが見事なマスゲームで踊り、心からの歓びをもって歌う様子は、文字通り圧巻でした。祭典については、多分ご担当の方から詳細のご報告があると思いますので、私は別な観点からこの旅行を振り返ってみようと思います。

それは、「奇遇」ということです。当然のことながら、もともとは合唱経験のある方が構成メンバーの中心ですから、5月の説明会でこれまでに一緒に歌ったことのある方にお会いしましたし、またラトビア語教室の関係者も、講師の堀口氏はもちろんのこと受講生が何人もいらっしゃるのとお顔見知りが多く、出発前から楽しみにしていました。そして、初対面の方も皆さんとても気さくですぐにうちとけ、旅を何倍も楽しむ事ができました。10日間お部屋をご一緒した夏子様は、間接的には存じ上げていたものの、個人的にお付き合いするのは今回が初めてでしたが、加藤夫人のお引き合わせで、

起居を共にし、何度も美味しいお酒の杯を上げました。また、「十字架の丘」で清水夫人がお会いになった別のツアーの方が、何と私の友人と小学校が同窓で、しかも在学中はとても親しい間柄だった事がわかりました。さらに、それぞれ大所帯のサークルだったので在学当時は面識がありませんでしたが、内山氏とは早稲グリと日本女子大学合唱団で同期だったこともわかりました。

年齢的な事もあり、ここ数年、合唱団時代の学生指揮者だった友人をはじめ、何人かの方が私の住所録から消えてしまい、寂しい思いが続いていました。この旅行に参加しなければ経験しなかった新しい出会いがあり、そのうえ〇〇歳の誕生日を皆様にお祝いして戴いて、これからまだまだ楽しく元気な人生が送れるような気がして、今、とても幸せな気持ちです。

それにつけても、教室の授業が終わった後、旅行の打ち合わせをしている場に何度か同席させて戴き、大勢の方のご尽力でこの旅行が実現したことを目の当たりにしました。お世話を下さった方々に、改めて心からお礼申し上げます。また、最後になりましたが、旅行前の会話講座には、多数の方がご参加下さいましてありがとうございました。

ラトビア語教室は8月13日から第3期スタートです。

ラトビア語教室の成果

堀口 大樹

大使館で行われてきた教室で学ぶ人にとっては、自分たちが勉強して

LATVIJAS AVĪZE (ラトビア新聞・7月12日付) が協会のラトビア訪問を報道

ラトビアの音楽への愛を込めて

第24回歌の祭典の見学のため日本ラトビア音楽協会のメンバーがリーガを訪れている。彼らもまた、自らの合唱団でラトビアの歌を歌った。

(ジルツ・コンドラーツ)

日本ラトビア音楽協会はすでに5年を迎えようとしている。その設立者の一人、現協会専務理事加藤晴生は1992年に初めてラトビアを訪れた。その時、ラトビア民謡、とりわけ合唱音楽に興味を持った。これには女声合唱団ジントルスとその指揮者アウスマ・デルケーヴィツァの存在が大きい。この合唱団の演奏を聞き、ラトビア人の歌のうまさに感心し、後に来日公演を企画することに成功する。協会の合唱団については約50人からなり、ラトビアにはすでに4回目である。外務省は彼らに歌の祭典ク

ロージグコンサートを見る機会を提供した。これは遠い日本でラトビアの文化を促進していることに対する報いである。

大学教師、学生、サラリーマンを含む協会のメンバー167名は余暇にラトビア音楽や文化に興味を持ち、日本でそれを広めようと努力している。加藤晴生は、ラトビアは日本ではまだまだあまりよく知られていないと言う。しかし状況は少しずつ変わってきている。すでに日本の合唱団のレパートリーの中にはペーテリス・ヴァスクスの「鳥の歌」のようなラトビアの音楽が組み込まれつつある。同様の交歓プログラムの他、ラトビアと日本の音楽コンサートも7月には始まる。在日本ラトビア大使館からも大きな支援があり、ペーテリス・ヴァイヴァルス大使も個人的にラトビア語教室を支持している。(訳・堀口)

きた言葉が実際に使われている環境に身をおけた時間は貴重であったと思います。よい刺激になったのではないのでしょうか。4日間では、ラトビア人と話す機会や場面は限られていたと思いますが、簡単な挨拶や自己紹介、数字の言い方は実践できていたようです。外国語を勉強している(したことのある)という経験はその場所での過ごし方や、そこで見たものの受容の仕方、現地の人々に対する見方を多少なりとも充実させ

てくれたはすです。

また旅行直前にラトビア語の挨拶を勉強された方にとっては、簡単な「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」といった、たった一言、二言の言葉が、相手を笑顔にできる力を持っていると感じ取っていただけの機会であったのではないかと思いますし、私もそのお手伝いをさせていただけたのであれば光栄です。

🎵 短 信

リーガ大聖堂少年合唱団の

来日公演日程確定

11月30日 兵庫・稲美町
12月 3日 福岡・北九州市
12月 6日 大阪・高槻市
12月 7日 兵庫・西宮市
12月 8日 東京・日経ホール
12月 9日 福島・福島市
12月10日 東京聖マリアカテドラル協会
12月13日 愛知・岡崎市

【プログラム】

パッサ・グノー、シューベルトの Ave Maria、ラトビア民謡、世界の伝統的クリスマスソング他。

【お問合せ】

アルス東京03-3580-0379

但し12月8日の東京演奏会は日本経済新聞社文化事業部
03-5255-2852

当協会創立4周年記念レセプション

【日時】9月15日 12時～14時

【会場】ARK HILLS CLUB

(六本木)

【会費】男性9000円、女性8500円、学生8000円

※詳細は事務局からご案内します。

東川町・ルーイヤナ町が姉妹都市に

早くからラトビアとの交流を図っていた北海道東川町と、ヴァイヴァルス駐日大使の故郷であるラトビア・ルーイヤナ町が7月17日、東川町役場で正式に姉妹都市提携協定を結んだ。ヴァイヴァルス大使臨席の

下、松岡一郎東川町長とG・グラトキンス・ルーイヤナ町議会議長が契約書に署名した。この日、ルーイヤナ町から寄贈された「ルーイヤナ・東川町友好ポンプ」(井戸)の除幕式も行われた。今回の訪問団はグラトキンス町長以下同町幹部と林業関係会社代表など20名、他に青少年の音楽交流を目的に、引率教員を含む中・高校生5名の吹奏楽団員が同行した。提携に至った経緯については、Latvija 11号「東川町企画総務部のルーイヤナ町訪問記・美しい古都との新たな絆」をご覧ください。

大塚清一郎氏の出版記念パーティー

当協会顧問の大塚清一郎氏(前ラトビア大使)がこのほど「キルトをはいた外交官」を刊行、出版記念パ

ーティー8月7日、神田の如水会館で開かれ約200名が出席した。同氏は東京バグパイプバンドの代表者で、1999年ニューヨークのセント・パトリック・デイ・パレードでベストバンド賞を受賞している。パーティーでは子息・清輔氏とバグパイプの見事なデュエット演奏を披露した。ランダムハウス講談社刊・1600円(税別)

松原千振氏が稲門グリーを指揮

第5回東京6大学OB合唱連盟演奏会(8月2日・東京芸術劇場大ホール)で、当協会常務理事の松原千振氏が稲門グリークラブ(早稲田グリーOB)を指揮、好評を博した。演奏曲は、幼き日の思い出(トルミス)、賛歌(シベリウス)他。



私たちは人びとの健康を高め
心豊かな社会づくりに貢献します

 **大鵬薬品**

<http://www.taiho.co.jp/>

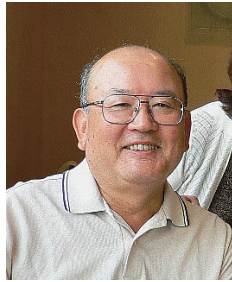
感動！驚嘆！参加者の声・声…

ラトビア歌の祭典

選抜された12000人の見事なアンサンブルに合唱の原点を教えられた

工藤 悠一郎

(東京稲門グリークラブ指揮者)



ラトビア、リトアニアなどのバルト3国は今までに一度も訪問する機会のなかった国々である。日本ラトビア音楽協会から5年に一度開催される合唱祭見学を兼ねてのツアー計画が知らされたときに、この機会を逃したら一生訪ねることもない国であろうから是非とも参加したいと思った。この世に生まれたからにはいろいろな国に行き、いろいろな文化に接してみたいと思うのは人間の性だろう。そういう意味からすると協会の計画はありがたかった。

ラトビアが合唱の盛んな国であることや野外で演奏する合唱祭が壮大なものであること、ユネスコの無形遺産にも登録されていることなどは聞かされていたが具体的なイメージはまったく掴めなかった。合唱祭というと各団体が自分たちで練習してきた曲を聴衆に披露するというようなものと漠然と思っていた。プログラムには指揮者、曲名が記載されていたが、野外の大きなステージで合唱祭がどうやって進行するのだろうかは全く見当がつかないまま当日を迎えた。

イメージが湧かない筈である。巨大な野外のステージに立つ12,000名全員による大合唱なのである。12,000人が同時にプログラムに従って同じ歌を歌うのである。聴衆は数万人はいたであろう。大変な規模の祭典である。1週間に亘って各地で歌と踊りの祭典が繰り広げられる

が、われわれが聴いたのはその掉尾を飾る最大のイベントであった。大統領も出席して「歌がラトビア人をまとめてきた」と祝辞のなかで話されていた。まさに国をあげてのイベントという感じである。

われわれが宿泊したホテルの前の公園にある野外ホールでも、また旧市街地の特設ステージでも朝から晩まで歌われていた。要はこの1週間はラトビア中が合唱オンパレードだったということだろう。

合唱祭そのものの様子が判ってくると、今度は「ラトビアという国は何でこんなにまで合唱が盛んな国なのだろうか」という疑問が湧いてきた。

歌の祭典は19世紀初めから民族全体の愛国心や民族運動を駆り立てるものとして、ラトビアだけでなくヨーロッパで広く行われていたそう。ラトビアの第1回祭典は1873年に行われ今年が第24回目となる歴史ある祭典である。135年前にはじまったこの祭典は二つの世界大戦があったにもかかわらず、絶えることなく今日まで続いているというからちょっとやそとの歴史ということでは片付けられない由緒ある祭典である。1873年というと日本では江戸から明治になったばかりの明治6年のことである。西郷隆盛が起こし

た西南戦争が1877年（明治10年）であるから、それより前から続いている祭典なのである。第二次世界大戦後にソヴィエト連邦の支配下に入るのであるが、この時期のソ連の出方によっては今日の姿はなかったかもしれない。全てに圧力をかけてきたソ連であったが、合唱に対してだけは寛大だったようだ。レーニンの「芸術は人民のものである」というスローガンを「芸術は義務である。すべてのコルホーズや工場には合唱団がなければならない」と解釈されていたという。歌詞内容の検閲は厳しかったようであるが、ラトビアの合唱はソ連支配時代も途絶えることなく、むしろ盛んになって今日に至っているという。

われわれが聴いたのは7月12日（土）の今年の歌の祭典のクロージングコンサートである。場所は市内から10数キロ離れた森林公園の中の大野外ステージである。日本ラトビア音楽協会はラトビアにおいても相当に認知された協会のようで、当日の会場近くの特設パーティ場で開催された外務省主催のパーティにわれわれ全員が招待された。市内の外務省に集合し、招待者を乗せたバス5台はパトカー先導でまことにあっけなく会場まで到着してしまった。当日の午後にはバケツをひっくり返したような雨が降り、開始は予定の21時から21時30分に変更となったが、21時30分と云ってもこの時期のラトビアはまだ明るい夕方である。それから12,000名による大合唱が始まり、ようやく日没を迎える午前1時の終演まで楽しい合唱が続くのである。曲はラトビアの民謡が多かったが、コンクールで選抜された合唱団の集合体とはいえ300もの団体が同時に歌うのであるから事前の各団体での練習ではテンポ、強弱等を確認して相当急入りに行ってきたのであろう。見事なアンサンブルであった。身体全体でリズムを取りながら歌っているのが何となくわかるくらいである。夜空に余韻を



ブラックヘッドギルドの前で全員記念撮影



踊りの祭典に出場する可愛い少年少女たちがポーズをとってくれた



本番に出場出来なかった合唱団も街中の特設ステージで演奏

残すフォルテでのエンディングに感嘆するとともに、静かに消え入るようなエンディングでは感動のあまり目頭が熱くなってしまった。オーロラビジョンで歌っている人たちが映しだされていたが、生き生きとした表情は本当に歌が好き国民で、歌を楽しんでいるということがよく伝わってきた。

“合唱の原点はここにあり”ということを教えていただいたような心揺さぶられた合唱祭であった。

入場チケットの手配などいろいろご苦労いただいた加藤様はじめ協会のみなさまがたには大変お世話になりました。ありがとうございました。

(2008年7月)



歌う人、聴く人が一体になった見事なパノラマ図（歌の祭典）